



JAZZ!

ジャズ喫茶を題材に、異文化の自文化化を考察する



んな価値が付与されていったのか、全国のジャズ喫茶をまわってインタビューを重ね、古いジャズ雑誌を分析して論証しました。今は音楽が空気のようになっていますが、戦後しばらくは輸入盤レコードが、高価な時代です。図書館にも置いてありませんし、ジャズがラジオで流れていても、時間がごく短いので、ゆっくりジャズを聴きたかったらジャズ喫茶に行くしかなかったのです。

日本で最初のジャズ喫茶は、昭和4年（1929年）に誕生しました。大正・昭和初期のカフェ文化の延長です。新しくやってきた蓄音機という舶来文化を味わう日本独自のモダン空間として生まれました。

やがて録音機ができて、過去の名演奏や行ったことのない国の人の演奏を聴くことができるようになったのです。戦前のジャズ喫茶には、西洋文化を感じる場所としての役割がありました。戦後になり、ジャズ喫茶は、戦前とは違った役割のもと発展していきます。1970年代には、全国で約600軒以上のジャズ喫茶がありました。やがて日本経済の発展とともに一般家庭にもステレオが普及し、さらに音楽が携帯できる時代がきたことで、ジャズ喫茶は徐々にその役割を終えることとなります。音楽の研究一つとっても、技術や歴史、文化など複雑に入り組んだものを考慮しなければならぬのです。

あたりまえと

信じられていることに

疑問を投げかける

私は周りの期待を裏切るのが趣味（笑）で、「あの人、沖縄文学研究しているよ」といわれると「違うよ」、「ジャズを研究している?」「違うよ」というように、研究テーマを変えています。飽きっぽいかもしれませんが……。

私の興味は、普段何気なく触れている文化が、どのような変遷を経て人々に受け入れられ、形式化されてきたかを探る

ことにあります。研究対象としてきた、アメリカ占領下の沖縄文学や日本におけるジャズ喫茶文化は、アメリカによって持ち込まれたものから影響を受けながらも、日本独自のものとして変化してきました。普段あたりまえと信じられていたことが、誰かの手によって恣意的に加工されていたりするわけです。

日本独自の

モダン空間として発展

日本では欧米文化の受容が本格的に始まるのは明治時代です。ジャズは大正時

代に入ってきてはいましたが、戦時中に敵性音楽禁止ということで、下火になってしまいました。ところが戦後になると、ジャズはハリウッド映画と並んでアメリカ文化を代表するものとして受け入れられるようになりました。戦前に流行したジャズは眉間に皺を寄せて聴くようなインテリ向けの難解なものではなく、大衆音楽として人々から受け入れられています。大衆音楽のイメージだったのです。それが1960年ごろから変わっていきます。

昨年上梓した『ジャズ喫茶論』では、海外から入ってきた音楽の位置づけやど

ニューヴェルヴァーグ映画とともに 高尚なモダンジャズに

戦後初期に日本で流行したジャズの形態はスイングジャズで、ビッグバンドの演奏に合わせて踊るような音楽でした。モダンジャズの発端となったのは、ビートルのような少人数による難解なハーモニーとハイスピードな曲でした。しかも、演奏者はエンターテインメントよりも真面目に高度な音楽を追求している雰囲気があったので、ジャズが芸術音楽に昇格していきました。

戦後、日本でモダンジャズが流行るきっかけをつくったのは、アメリカ発信ではなく『死刑台のエレベーター』といったフランスのニューヴェルヴァーグ映画でした。昭和33〜35、36年ごろ、新しい映画に挑んでいたフランスの20代の監督がアメリカの一流ミュージシャンにサウンドトラックづくりを要請しました。その音楽が、若いインテリや芸術家、そして文化人に憧れている若者に注目されたのです。「フランスのインテリが認めるお墨付きの音楽」がモダンジャズだったのです。安保闘争前後で、時代の空気にも合っていたのでしょう。1960年代の雑誌を見ると、「モダン」と冠がついて、モダンジャズという表現になっていきます。これはある意味で近代モダニズムに沸いた大正時代と類似しています。新しい「もの」が入ってきて、自分たちが求

めている、あるいは直面する問題から脱却する機会を与えてくれる感覚です。

日本における ジャズのヒエラルキー化

前衛的な若者文化にかかわっている人たちが、ジャズに感化されたことで、ジャズのイメージが一変しました。日本人の想像のなかで、「ジャズのヒエラルキー」がつくられていくのです。それまで日本でジャズといえば、白人のビッグバンドによる音楽が主流でした。それが、ジャズといえば、黒人による情熱的で強烈かつ難解なものに変わっていったのです。日本では安保闘争、アメリカではアフリカ系アメリカ人の公民権運動とつながって、政治的な音楽、抵抗の音楽としてイメージされ始めたのです。

ジャズは黒人がつくり上げたものであることは間違いありません。しかし、そこに政治性をみるのは単純すぎる思い込みです。実際には公民権運動の中心になった音楽は教会音楽でした。教会で歌い、力を蓄え団結して、外に出ていくというもので、決してジャズが公民権運動に密着していたわけではありません。

日本では、安保闘争のデモに出るときに、学生証を行きつけのジャズ喫茶に預け、機動隊に追われてジャズ喫茶に逃げ込んだというエピソードがあります。結果として、こうした体験が、アメリカでジャズとイデオロギーが密

着していたという思い込みをつくり上げてきたのです。

カテゴリーがひとり歩きして 偏ったイメージをつくってしまう

日本全国のジャズ喫茶を訪問して、一番印象に残っているのは、博多で見つけた古いジャズ喫茶です。店内には、1万枚を超すLPレコードがありました。驚いたのは、ジャズブームはもとより、レコードすら知らないかもしれない20代の若者が、お店を任されていたことです。彼に、どのようにしてレコードを探しているのか聞いたところ、「うちにはレコード地図がある」と彼は答えました。見せてもらうと、レコードはまず楽器別に分類されていました。そのサブカテゴリーは、黒人、白人、ヨーロッパ人、日本人と人種別・国籍に分類されています。検索しやすいようにオーナーがカテゴリー分けをしたのでしようが、無意識のうちに序列がつけられてしまっているのです。ジャズという音楽

カテゴリーにおいては、黒人ミュージシャンが頂点で、日本人は最後というように。こうして誰かがたまたま便宜上カテゴリー分類したものが、ひとり歩きし、一般的な認識として定着してしまうこともあるのです。

カテゴリー化することで、ある部分は隠蔽されてしまいます。よって、人の手により加工されたカテゴリーを当然だと考えるのではなく、複眼的な考察が必要になってくるのです。

異文化を自文化として取り込む自文化化により、見えなくなったものを見るには、歴史的に遡るという方法があります。演歌について書かれた本によると、現在演歌と呼ばれている音楽が普及するのは1960年代半ばで、ある意味でそれは、音楽産業によって新しく作り上げられたものなのです。

カテゴリーや価値観は、何らかのきっかけでできたものであったり、偶然出てきたものであったりするものなどといったもいでしょう。

これまで常識のように見えていたものに、疑問を投げかける。グローバル化の進展が著しい時代にこそ、必要なアプローチなのではないでしょうか。(談)

社会学研究科教授

Mike Molasky (マイク・モラスキー)

1956年米国セントルイス市生まれ。コネティカット・カレッジ准教授、ミネソタ大学教授等を経て、2010年一橋大学大学院社会学研究科教授(地球社会研究専攻)。著書に、『ジャズ喫茶論——戦後の日本文化を歩く』(2010年、筑摩書房)、『ニュー・ジャズ・スタディーズ——ジャズ研究の新たな領域へ』(2010年、共編著、アルテスパブリッシング)、『占領の記憶/記憶の占領——戦後沖縄・日本とアメリカ』(2006年、青土社)、『戦後日本のジャズ文化——映画・文学・アングラ』(2005年、青土社、2006年サントリー学芸賞受賞)などがある。ジャズピアニストとしてライブ活動もしており、リリースしたCDに、『“Dr. U-TURN” Mike Molasky ~ solo piano ~』(2010年、STUDIO SONGS)、『“MIKE MOLASKY TRIO--LIVE” BACK AT AKETA!!』(2006年、AKETA'S DISK)がある。

【Official Web Site】<http://molasky.nsf.jp/>